

高橋誠一郎の新著

『「罪と罰」の受容と「立憲主義」の危機』（2019、成文社）に寄せて

長瀬 隆

本書がこれまでの数多い高橋書と異なるのは、執筆の目的意識が格段に明確なことである。それは、序文である「はじめに 危機の時代の文学」のなかでは、ドストエフスキー文学への関心に関連して「小林（秀雄）の歴史認識が徳富蘇峰の「英雄観」や「史観」を受け継いでいる点が意外と多いことです」という言葉に現れている。小林秀雄への批判は彼から度々聞いてはきたが、徳富蘇峰との関連で述べられるのはこれが初めてであって、この「発見」は高橋氏においても最近のことに属するようで、「意外と」という但し書きにそれが感じとられる。だがこれは客観的には大「発見」なのであって、これによって小林の文壇的処女作『様々なる意匠』のうちの「一つの意匠を信じないために、様々なる意匠を信ずる」の、人々を幻惑した文言の真意が明確にされることになった。

ドストエフスキー研究者としての高橋氏の特徴は、このロシア作家が生きた帝政ロシアの社会が「正教・専制・国民性」の「三位一体」を強調したロシア版の「教育勅語」（時代的にはこの方が後だが）が支配する社会であることの把握が明確であることにあった。これはかねがね私もよく承知してきたことで、常に好感してきた。しかし今回これに「憲法」が加わった。言うなれば十九世紀のロシアは憲法の無い国だったのである！氏は本書で記していないが、ロシアに帝政下での立憲を掲げた政党（カデット）が出現するのは二十世紀に入ってからであって、「血の日曜日」があった1905年の出来事である。しかしその実現は、もちろん、この党によってではなく、1917年のロシア社会民主党（共産党の前身）による革命後になってであり、その時帝政は消滅していた。ロシア最初の憲法は「社会主義憲法」となった。1866年に書かれた『罪と罰』が英語からの重訳によって日本で読者を持つのが1889年以降であり、この年には明治政府によって日本ではいわゆる明治憲法が公布されていた。

日露戦争で日本は勝利しロシアは敗れたが、憲法の有無では日本社会のほうが進んでいたのであり当然だった。そして敗戦が原因のひとつとなってロシアに革命が起こる。社会主義を自称するソビエト国家が出現し、全世界に多大な影響を及ぼし、七十一年間存続して、19

91年に終焉、ロシア共和国に変じた。日露比較文明論を書いて来た氏であるが、先行諸著におけると同様に、このソ連の崩壊もしくは終焉は、この書においても、ほとんどまったく問題にされていない。重大事とされているのは二十一世紀の今日安倍政権下で推し進められている、第二次世界大戦後、1946年に制定された憲法の改悪の動きであり、これを策謀している右翼復古主義的な日本会議などの動きである。これへの危機感が執筆の動機となっている。

実のところ私は冒頭の「帝政ロシアの首都サンクト・ペテルブルクを舞台に、自分を「非凡人」とみなした元法学部学生ラスコーリニコフの犯罪とその結末」の文言には抵抗を覚えたのだ。ラスコーリニコフは「己は非凡人か、ただの虫けら（凡人）のいずれか」と自問していたのであり、それを明らかにすべく犯罪に走ったのであり、この二重性はシベリアの流刑地に送られてからも完全には払拭されていない。そこでみる「人類滅亡の夢」は高橋氏によって過大に評価されていると私は考えてきた。ラスコーリニコフは真の悟りには到達しなかったのであって、それ故にドストエフスキーはさらに書き続けなければならなかったのだ。ラスコーリニコフのさらなる発展、その完成を私はイワン・カラマーゾフに見るが、この人物は『ヨハネ黙示録』にある最後の審判の実現を信じていない。「入場券が高すぎる」のである。一方ラスコーリニコフはポルフィリーの念押し質問に「第二のエルサレムを信ずる」と答えていた。

ともあれ『罪と罰』は明治維新後の近代日本文学において、透谷、一葉、子規などにおいて理解者を持ち、とくに島崎藤村『破戒』において実作のうえで影響を与えた。そしてこの藤村は、時代が進み、昭和に入り、「治安維持法」によって言論や表現の自由が大幅に規制され、明治憲法の「立憲主義」が否定され「時代になって、黒船の来航に揺れた幕末の時代を主題とした長編歴史小説『夜明け前』を製作することになった。

幕末の危機感のなかで生じた平田篤胤の復古の狂信的愛国思想、その信奉者となった藤村の実父をモデルとし、明治新政府の樹立とともにそれが否定され、このため失望して発狂死した生涯を批判的に物語ったのが『夜明け前』という小説であった。しかしながらこの日本を「神国」とみなすこの思想は、高橋氏が敬愛する司馬遼太郎によれば「明治になってからもなお脈々と生き続けて、昭和になって、昭和維新を信ずる妄想グループにひきつがれ、ついに太平洋戦争をひき起こして、国を惨憺たる荒廃におとし入れた」のである。

大東亜戦争の勃発とともに、大東亜文学者会議の評議員になり、1942年には『文学界』で戦争支持の座談会「近代の超克」を主催した小林秀雄は、敗戦後の戦争責任追及の雰囲気の中で、己の「戦犯性」を自覚しないわけにはゆかなかった。にもかかわらず、雑誌『近代文学』が記念すべき第1号の座談会の蔵原惟人（冒頭司会の本多秋五は「蔵原惟人の

名は私たちにとって神のごときものであったのであります」と述べている）、そして第2号の宮本百合子に続き、第3号に小林秀雄を招致したのはなぜだったのか。六人の同人の中の二人、埴谷雄高と平野謙が小林のドストエフスキー緒論を評価していたからだだった。

その出発以来、小林はプロレタリア文学派がドストエフスキーについて言及しないことを揶揄していた。作家の母国のソ連においてもドストエフスキーは長く禁圧されていた。とくに『悪霊』が危険視されていて、このことは1947年の雑誌『思潮』の座談会「ドストエフスキーをめぐる」（木寺黎二、埴谷雄高、中村真一郎、司会は編集長の窪川鶴次郎）においても、木寺黎二（松尾隆）によって『悪霊』という作品の反動性ですね、あれがいかんのだろうと思うんです」と証言されている。

高橋氏は、小林秀雄のドストエフスキーが作品分析を欠いた主観的なものであることを指摘し、批判する。しかしながら似たような状況はロシアにおいても存した。ペレヴェルゼフはその『ドストエフスキーの創造』（1912）において、冒頭の章で「ドストエフスキーはさまざまな観点から研究され論議されてきた。しかしその大部分はドストエフスキーについて語るのではなく、ドストエフスキーに「関連して（かこつけて）」語っているにすぎなかった」と述べる。それらの緒論から私たちは「形式と内容における彼の作品の特質はどこにあるかを知りえない」。私たちが知りうるのは「いかなる点でドストエフスキーがそれぞれの批評家の好みに合ったかということだけである」。その代表的な例として挙げられるのは、メレジコフスキーとミハイロフスキーの場合であった。メシア的救済の予言者としてドストエフスキーを祭り上げるために、前者はキリスト教が現れないことで、『罪と罰』以前の全作品を切り捨てて誤った。また後者はドストエフスキーの人物たちを狼と羊に二分し、第二作《Двойник》（二重人、分身）の主人公ゴリヤートキン（羊である）とみなした。そして「同情されねばならない主人公を虐めている」とし、作者を「残酷な才能」と決めつけたのである。ペレヴェルゼフは「ゴリヤートキンは羊ではなく、その内部で狼と羊が抗争するドヴォイニク（二重人）である」と批判した。表題にその語が明記されていることの意味が論者に把握できていないとした。

帝政ロシアの抑圧された社会に生きてドストエフスキーはそこからの出口を求め、それが見出されないことを地下（室）人の口を通じて嘆いた。「我々とはつくの昔に生きることをもってしまった先祖から、死んだままで生まれて来たのだ」。そして晩年、「作家の日記」のなかの作品「おとなしい女」のなかで、これが繰り返されている。「野に生きている人はいるのか？——とロシアの勇者は叫ぶ。勇者ではないが私も叫ぶ。しかし応答はまったくくない」。全集を通読した人は目にした文言であるが、ドヴォイニクの場合と同じく、これに言及したのも、膨大なドストエフスキー論者のなかで、ペレヴェルゼフがただ一人なのである。彼は

「生きた人はいる」と答え、検閲への配慮から言葉は伏せたが、工場労働者、プロレタリアートがそれであると暗示した。彼はロシア革命への道を切り開くべく『ドストエフスキーの創造』を書いたのであり、続いて『ゴーゴリの創造』（1914）を著し、五年後に待望の革命を迎えた。

ペレヴェルゼフはモスクワ大教授となり、大活躍を開始する。しかし二十年代末にスターリン派からの攻撃を受け、職を追われることになり、その直前に、誤っているのは攻撃者たちであり、自身の立場こそが真正なマルクス主義であることを主張して、「ロシア文芸批評におけるドストエフスキー」を発表した。内容は、拙訳書『ドストエフスキーの創造』の第28章「わが結語」を拡大深化させたもので、1935年に『露西亜文学研究』第1号に、そうした経緯の説明ぬきで訳載された。同時に同誌に同じ著者の「ドストエフスキーと革命」が訳載されているが、これは革命後1921年の生誕百年祭での講演であり、後の「追放・失脚」の原因の一つとなったものである。『創造』の革命後の版に「（序文に代えて）」と括弧して冒頭に据えられており、拙訳書には収録した。さわりの一箇所を掲げておこう。

ドストエフスキーの革命ロシアへの態度はきわめて複雑である。彼を反動呼ばわりすることは、彼のうちに革命への雷鳴、一揆（ブント）を熱望する人々に対する疑いのような理解がある以上、誤りであり、公正でないだろう。しかしながらだれも彼を革命家と呼ばないのだが、それは彼の書くものまるまる半分が革命精神に対立するものであり、それが彼により悪霊＝悪魔として、暗黒の精神として描かれているからである。彼は反動家でもなければ、革命家でもない。彼は同時に前者であり、後者である。これは逆説じみており、非合理的である。しかしながらドストエフスキーはまさに非合理的であり、矛盾しており、内的に不調和な人だったのだ。二重分裂、矛盾した志向の闘争が彼の精神構造の大きな特徴であった。

戦前三笠書房からドストエフスキー全集の刊行が開始され始めた1935年はいわばドストエフスキーの年（と同時に治安維持法によって日本共産党が壊滅せしめられた）であって、同じく岡沢秀虎によって『創造』のなかのラスコーリニコフとイワン・カラマーゾフの二つ章が別々の商業誌に翻訳発表された。しかしこのときすでにソ連ではドストエフスキー＝ペレヴェルゼフの禁圧が起こっていたのであって、これは長期にわたって続き、戦後になりゴルバチョフが登場するまで続くのである。そしてソ連のこの状況こそが、小林秀雄のドストエフスキーがなにやら権威をもつかのとき幻想が日本で続いたことの原因なのである。この「権威」を疑った最初の人は、あるいは埴谷雄高だったかもしれない。彼は三笠版全集の別冊として刊行されていた木寺黎二の『ドストエフスキー文献考』から

E・H・カーの『ドストエフスキー』を知り、小林書と比較対照して、小林が多くの点でカーに負っていること知り、これを『近代文学』の同人会で話したのである。それを花田清輝がヒョーセツと面白可笑しく諸所方々に吹聴して歩き、大騒動となった。

木寺黎二は本名を松尾隆という。早大では第一高等学院で英語の教鞭をとりながらロシア文学、とくにドストエフスキーに傾斜、三笠全集では書簡集の訳者に名を連ね、またシエスト三巻選集の翻訳スタッフでもあった。ただし戦後は本名に戻り、マルクス主義哲学の啓蒙と宣伝、平和運動、学生運動の指導に力をそそぎ、文学からは遠ざかっていた。にもかかわらず小林ヒョーセツ問題の真偽を判定できるのは木寺以外には無いということになり、執筆依頼が重なり、小林は心中おだやかではなかったらしく面識のなかった松尾を自宅に訪ねている。またその前後関係は定かではないが、東京新聞の前身である都新聞に三回にわたって『「小林問題」管見——』が連載された。そしてまたこの延長として、先に触れた『思潮』の座談会に出ることになったのであるが、これらが木寺黎二としての戦後初の登場であり、また最後となった。

松尾隆は多彩な人であり、英文科の出身でありながら大学院では仏文の吉江喬松に師事、比較文学を教えられており、昭和十年代の『早稲田文学』では同時代の日本文学を対象とした文芸評論の執筆者でもあった。そして1987年になって私によって明らかにされるのであるが、戦時下にあつてペレヴェルゼフの『創造』の全訳を目指した。しかし決定稿に至らぬまま敗戦により、放棄、1956年に四十九歳で没している。

小林秀雄もまたとうに故人であるが、高橋氏のきわめて優れて斬新な小林否定論に接して、私が私淑した松尾隆に言及しないでおれないのは、このためだけからではない。小林の『様々なる意匠』を二位に抑えて「敗北」の文学」で一位を占めた宮本顯治が早大とも松尾隆とも格別に親しい関係にあつたからである。受賞後の宮本の第二作は早大露文科の創始者である片上伸を論じた長文の「過渡時代の道標——片上伸論」であり、さらにこの宮本こそが小林秀雄批判の嚆矢である「小林秀雄論」をすぐ続いて書いているからである。そしてすぐに捉えられて獄中生活にはいり、十二年をへて敗戦により釈放される。小林批判論の古典であるこの論文と高橋論文はどういう相関関係にあるだろうか。

戦後松尾隆は宮本と密接な関係にあった。たとえば澎湃として学生運動が起こったのであるが、東大を中心とした官学連と早大を中心とした私学連は1948年に統合して全学連とを結成するが、この産婆の役を果たしたのは兩人（の緊密な提携）であり、その成立は二人の友情の結実なのである。初代全学連委員長の武井昭夫はこれを念頭に「戦後学生運動は早大松尾教授抜きには語れない」と記した。共産党はその後1950年にコミンフォルム批判

によって分裂したが、松尾は一貫して宮本の統一会派に属して助け、全学連もまたこれに従ったのである。

平和運動に熱心だったのもこの派であり、松尾隆は日本平和委員会の常任理事であり、1955年に日本原水協が成立すると、早大全学自治会議長だった吉田嘉清をその事務局次長に据えた。私もまたこの人との縁で1957年に原水協がソ連に送り出した使節団にロシア語スタッフとして行く機会を得、またその延長で翌々年の1959年にウィーン青年学生友好祭に行き、同行者だった日本被団協代表女性と帰国後結婚した。

さてこの原水禁運動であるが、国民運動として発足しつつ、1964年には分裂し、原水禁国民会議が誕生し、再統一し、しかる後、1985年に代表委員になっていた吉田嘉清が運動方針をめぐって宮本議長の日共から除名され、原水協からも排除された。松尾隆とやはり昵懇だった古在由重氏が吉田を支持して離党。私は吉田ら原水禁運動で私たち夫婦が親しかった人々が集い結成した団体、平和事務所に乞われて参加し、バルト三国のチェルノブイリ被ばく者支援などに従事してきた。

私は結婚後ソ連貿易に従事して生活してき、七十年代末にソ連社会が閉塞状態に陥ってき、救いのない水域にはいつているのを見ることになった。またその段階に至って、生まれ育ってソ連占領下で一年半暮らして引き揚げた樺太、それについて書かねばならないとは引き上げ前から思っており、しかし長く書けずに来た樺太が書きうるものになり、最初の小説作品『樺太よ遠く孤独な』を上梓した。またその続編として被爆者の妻との結婚にいたる経緯を記した『ヒロシマまでの長い道』の製作に入っていた。

それは松尾教授の没後三十年にあたった年で、記念行事の準備の過程でドストエフスキー関連の未発表の未完の原稿が発見され、私が一年を要してペレヴェルゼフの試訳と特定。存命中は私に一言も言わなかったロシアの文芸学者だった、しかしそれは、木寺黎二が名著と賞賛されてきた『ドストエフスキー文献考』のなかで、「画期的名著」と紹介していたものである。彼だけではない。最初の訳者と成った岡沢秀虎は雑誌『露西亞文学研究』1号（2号以降は存在しない）の編集後記でペレヴェルゼフの二編を訳載したことに「これだけによっても雑誌発行の意義がある」と自賛しているのである！

実は現2019年は早大露文科の創立百年だということである。しかしこの百年には、学科としては閉鎖され、専任講師だった岡沢秀虎がロシア文学・語学の講座を持つだけだった十年があった。閉鎖の理由は諸説あるが、治安維持法が猛威を振るっていた時代の出来事である。『文学界』に対抗する文芸評論を『早稲田文学』に書いていた木寺黎二は、大東亜戦争の勃発後にはその筆を折っている。日本の敗戦を見越し、『ドストエフスキーの創造』の完読と翻訳に向かった。しかし岡沢も木寺も戦後はペレヴェルゼフについては口を閉ざした。

戦後の1956年は露文科復活十周年の年であり、記念行事があり、ドストエフスキーとゴリキーのシンポジウムがあり、またソ連共産党の二十回党大会でスターリン批判が行われ、その余波としてのハンガリー事件があった年である。教授は「キーロフの暗殺はスターリンの仕業だったとはね」と暗然としていたが、ペレヴェルゼフについては、まことに「ペ」の一音さえ口に出さなかったのである。もしも伝達されていたならば、私は遅くとも一九六〇年代初めには『ドストエフスキーの創造』を、また続いて『ゴリキーの創造』を翻訳していたであろう。そしてその場合は、私自身も、また日本のドストエフスキーも今ある状態とは違っていただろう。

わが国のドストエフスキーは1968年に新谷敏三郎によってバフチンの『ドストエフスキー論——創作方法の諸問題』（ソ連での刊行は1964年）が邦訳されて様変わりしている。作家をもっぱら形式面から考察した書物であって、内容への言及が意識的に避けられていることに特徴があった。

1970年代に始まる新潮社刊の『ドストエフスキー全集』の邦訳がこれに続く。中心的訳者は江川卓であって、この人によって『ドストエフスキー』が岩波新書で出る。ドストエフスキーを原書に即して解説していて有意義だった。異なった表題訳を列挙しそれぞれの優劣を述べていた。しかし第二作の『ドヴォイニク』が「二重人（格者）」と「分身」に別れていることについては、まったく言及しておらず、これが重大な欠陥だった。そしてこれと密接に関連して『謎解き「罪と罰」』での迷論が生ずる。△分身関係にあるらしい二人の作者を見極めようとするうちに、さらに一人、その背後にいるらしいものが幻視されてくる。おそらくこれは作者を超える存在なのだろう。その超越的な存在こそが、青年に敷居をまたがせ云々。木下豊房によれば△江川の文脈で「作者を超える超越的存在」とはだれかと問えば、それは他ならぬ論者ということになり、ここから手品を思わせる江川流テキスト解釈が始まる△ということになる。△読者の特権をかくも過信した恣意的なテキスト解釈△がおこなわれたのであり、それを「天才（の試み）」と誤認した亀山郁夫によって後にこれが極端な段階にまで推し進められることになった。

高橋誠一郎が正しく指摘するように、ドストエフスキーは帝政の抑圧社会で執筆した。その作品群の中心に立つのは小市民（メシチャーニン）であるが、その精神的特徴は忍従と反逆の相克である。処女作のジェーブシキンにそれが認められ、見事に描かれて賞賛を博した。

しかし第二作では、反逆を目指して肉体的にも自己分裂をきたしたゴリヤートキンを描いて失敗した。その経緯をペレヴェルゼフは見事に分析していて、拙訳を読んでいた亀山郁夫

はその『ドストエフスキー——父殺しの文学』ではその箇所を援用した。（私には直接に「世話になりました」と言った）。

ドヴォイニクはピーナッツに例えられ、二重体を意味し、また左右に別れた個々の半分の名称でもある。作品群の中心に立つ主人公はこのドヴォイニクであり、初期作品のプリミチフな諸タイプの後に、そのような己の存在形態を哲学的に考察する『地下からの手記』の主人公が登場した。ラスコーリニコフはそれを社会＝法律的に拡大して考察し、『カラマーゾフの兄弟』のイワンに至って己と世界（神）について考察する二重人の登場と相成った。「二重人格」の訳語は不適切なのは、ペレヴェルゼフが記すように、「彼らは思想においてドヴォイニクであるのみならず、その感情においても、その趣向および欲求においても同様であり、最後に、彼らは心理学的のみならず、社会における物質的に二重な立場のために、こう言うてよければ、肉体的にもドヴォイニクなのである」からである。もともと「肉体的にも二重人」であるケースは二例あるにすぎない。第二作のゴリヤートキンとイワン・カラマーゾフの場合である。このことは失敗したゴリヤートキンとの関係でいうと、イワンが幻視する悪魔は完成形であるということである。

久しく日露の近代の比較文明論的著述をしてきた高橋氏が、現代を「危機の時代」と捉えるに至ったのは、安倍政権が目指している「改憲の危険性」、また付随して起こっている政官財の退廃の故であった。

小林秀雄はその『様々な意匠』において「ひとつの意匠をあまりあまり信用し過ぎない為に、寧ろあらゆる意匠を信用しようと務めたに過ぎない」と述べた。「意匠」は「衣装」に通じ、取り換えのきくものであるとの含意で言われており、ここでの「ひとつの意匠」とはマルクス主義、日本共産党、プロレタリア文化・文学運動を指すのであることは、これが出た当時から気づかれていた。しかし「あらゆる意匠」については、文字通りに受け取られて、詮索する人はいなかったかもしれない。恥ずかしながら私はそうだった。「あらゆる意匠」のなかには隠された一つの意匠があつて、それは平田篤胤↓徳富蘇峰と連なる復古神秘主義的ファシズム思想であることが高橋書では剔抉されており、多大に教えられたことに謝意を表する。

そして改めて宮本顯治の「小林秀雄論」と今回の高橋「小林批判」箸の関連を考察する。というのは、高橋氏は司馬遼太郎に依拠すること多大の人であり、しかしその司馬氏は「マルクスさん」と一度ならずマルクスを揶揄していたことを私が知っているからである。私には『日露領土紛争の根源』の著書があり、そこでのロシア帝国主義の記述はチェーホフとともにマルクス、エンゲルス、レーニンに依拠して書かれており、司馬氏の日露関係論とは少なからず異なっているのである。

早大露文科の岡沢秀虎は師片上伸の松山高校生宮本への高い評価（手紙が残っている）を知っていて、六全協（1955）による共産党の分裂の終息には「宮本君よくやりました」と賞賛し、「彼は早大露文にくるはずだったのです。片上さんが早稲田を去ったので東大経済

にゆきました」と教室で講義中に語ったものだった。またそれに先立ち戦後初期の評論で「片上伸論」で最良のものを宮本の論であるとし、「私はそれを超えようと思う」と記していた。しかしそれから数えても二十年近く生きたはずなのだが、片上論を残さなかった。超えるのは不可能と悟ったためなのである。

寡黙な人のそれではなかった、松尾隆は多弁にして雄弁家だった。ペレヴェルゼフはそのような人における沈黙なのであった。そしてその論文が、私が固く信ずるところでは、ドストエフスキーについての唯一無二の値打ちのものであることによって、この沈黙は重大問題なのである。

晩年のドストエフスキーが、神、われわれ日本人とは異なる唯一絶対神の有無を問題せざるをえなかったのは、帝政がロシア正教会の上層と結びついて、帝政そのものが神意によると説明・宣伝していたからである。人間とは不完全なものである以上、もしも神が存在するならば、社会の変革などは神にまかせておけばよいからだった。イワンが神の有無をしつように問題にしたが、それは世界（神）と人間のあいだにある深い調和を理解・想定できなかったからである。唯物論者ペレヴェルゼフにとつて「私と世界は一体であり、世界はわが内にあり、私は世界の中にある」。しかしイワンはそうではないのである。「世界と人間は彼にとつては統一体ではなく、二重体であり、連帯と合一の関係にはなく。支配と服従の関係である。その間にあるのは敵対矛盾であり、一方の勝利によってのみ終局がもたらせる永遠の矛盾である」。

同じくロシアの作家であっても、チェーホフには「神の有無」の問題は無かった。そしてスピノザに学んだアインシュタインは「神とは気体上の脊椎動物である」と冗談を言っていた。存在しないことはあまりにも自明だったので、真顔で主張するのは滑稽であると考えていた。ドストエフスキーはイワンを自滅するものとして描いた。ゾシマの有神は、『悪霊』のキリーロフの「神は無い、したがって己れが神だ」を裏返しにしたものである。ともに「生きている人」から無限に遠い。この最後の小説では二重性からの出口はクラーストキン先頭とする少年団（すなわち未来）に与えられている。「キリストは今のロシアに生きていたら、革命家の仲間に入って、めざましく活躍したにちがいありません」。

小林秀雄がドストエフスキーに心惹かれたのは、そこにマルクス主義との闘争の格好の武器を見出したと思ったからだ。木寺黎二は先に挙げた「小林問題」管見——その『ドストエフスキーの生活』をめぐる中で、「大騒ぎするほどのものではない」と一笑に付しており、ペレヴェルゼフを訳しかけていた人としては当然の言であるが、その事実を秘め、学生だった私に伝えなかったのはなぜか？ 長く考えてきたが、分からない。分かっているのは、その結果私が辛島和子（亡妻）に到着し、彼女によって現代の稀有の真実——トリウム炉に到着したということである。

一九九八年から戦後学生運動の総括を目指し、製作刊行した『早稲田・1950年・史料と証言』で「松尾隆」全五回200枚の連載の最後で、私は、日本原水協が発足してから二

年目の年、教授がこの運動に多くを託しつつ亡くなったことを記した。この遺訓をもっとも忠実に守って生きた人に、「原水禁運動の顔」と言われてきた先輩の吉田嘉清がおり、彼が二〇一八年に亡くなった。

原水禁運動——今日の言葉で言えば核兵器廃絶運動と原発推進（および反対）運動の関連について私は久しく疑問を抱いて来た。それは、原爆に遭遇したのは広島においてであるが、生まれ育ったのは大分市である妻との縁で、彼女と幼染みトリウム熔融塩炉学者古川和男氏を私が一九八〇年代後半から知り、交渉があったためである。現行のウラン軽水炉で大型であり、したがって操作が複雑で過酷事故の危険があるのに対し、こちらはその危険がまったく無く、かつウランの希少にたいしトリウムは遍在して経済的に有利であること、したがってこれをもって代えるならば、安全であるということだった。これが米国でも世界でも採用されてこなかったのは、副産物として核兵器以外に用途の無いプルトニウムを出さないからであり、しかし核兵器廃絶のためには、これこそが望ましいのである。

私は、しかし、二〇一一年3・11にフクシマが起こるまでは、『微笑の沈黙』『日露領土紛争の根源』や『ドストエフスキーとは何か』などの執筆に追われ、そこまで手が回らなかった。その一般向けでの啓蒙書としては初めての『「原発」革命』は妻あてに贈られていたにもかかわらず、読まずにいた。福島事故後に増補改訂版である『原発安全革命』が出て、これを読んで真価を知った。それで改めて古川氏とも会い、程なく亡くなったので、肉親を含む後継者たちに学び、『トリウム原子炉革命』を執筆した。「古川和男・『ヒロシマからの出発』を副題としたが、私が先行する『ヒロシマまでの長い道』で古川氏について、妻とのかかわりをすでに書いていたからだった。

この書のなかで私は全ての点で優れたトリウム熔融塩炉が米国で抹殺された理由を記し、有害なウラン軽水炉が、戦犯だった正力松太郎、また改憲論者の中曽根康弘らにより、勃興した原水禁運動に対抗し、それに水を差すようなやりかたで推進されたことを述べた。また原水禁運動の側が、そこには副産物のプルトニウムを利用しての核武装の意図が秘められたていることに気づかず容認してきたことも記した。そしてこれに気付いた原水禁運動の最良の部分においても、原発がそれ以外にも原理的には存在することを知らず、単純に原発を唱えていることも指摘した。フクシマ時に五十四基を数えていた既往の原発はその精神において日本憲法に反しているのに対し、古川和男の発明に成るトリウム熔融塩炉FUIIはその精神に合致し、その世界化は、古川が著書で説いているのであるが、日本の戦後憲法の世界化なのである。

私の古川和男の「発見」には、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』の序文が役だった。

述べたようにドストエフスキーの唯一絶対の神の有無の問題は、ロシアの変革と密接な関係があった。そしてその問題は『悪霊』で「神は無い」とするキリーロフを創造したとき、解決済みだった。しかしドストエフスキーは文学における美をキリスト抜きに考えることができなかった。かくて『カラマーゾフの兄弟』においては、主人公アレクセイをキリストに成る以前のイエスの再来と見立て、その十四年前を物語るという触れ込みで、その人物を「奇人」と定義し、「奇人というものは特殊で孤立的だ」、「(しかし)奇人こそが時によると全体の核心を自らの内部に宿し、同時代の残りの人々がある風の吹きまわしで、なぜか一時その人に背を向けるといった場合がよく見られる」と記した。

古川和男は、事故の際にプルトニウムその他の有害核物質を飛散せしめるウランを避けるべきであるという思想を立脚点とした。もっともこれには先達がいた。米国のウイグナーとワインバーグであって、まだ原爆が製造される以前に、原発の可能性を言いつつ、それが炉の冷却し失敗し、爆発を起こした場合、苛酷な事故と成ること指摘していた。つまりは2011年のフクシマを予言していたのである。米オークリッジ研究所はそれに基づきトリウム熔融塩原子炉の研究に勤め、日本では古川和男ひとりがこれに気付いていた。副産物としてプルトニウムを出さないことで冷戦派に忌避され、研究を中止させられた後は、古川和男がそれを完成。ヒロシマ・ナガサキの体験している日本では受け入れられると期待されたが、米国同様に阻まれてきたのであって、フクシマ後に私は意を決して『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著したのだった。

私は小林秀雄を文学（批評）の「神様」だと思ったことはない。最も優れた批判は、最も早く現れた宮本顯治の『小林秀雄論』（1931）であり、高橋誠一郎の今回の小林批判書は、氏は自覚していないだろうが、この宮本の流れに立つものである。

まことに小林秀雄とは戦後を生きながらヒロシマ・ナガサキにつてただの一度も言及せず、またそのために行動しなかった人だった。ナチズムを賛美しつつ、それを戦後の全集で改竄隠蔽するような俗人であり、否定されねばならない戦犯文学者であり、高橋誠一郎の告発はまことに有意義である。